GyouseiNews.Com
The Gyousei Chosa Shimbun
行政調査新聞

＜国内情勢＞

令和時代の幕開けを言祝ぐ

皇室と天皇について改めて思うこと

藤 井 厳 喜（国際政治学者）

いよいよ令和の時代がスタートした。
国民各位と共に、これを心からお祝いしたいと思う。令和の時代、日本が明るく平和で繁栄する国となるように、国民が一丸となって努力してゆきたいと思う。

天皇陛下が譲位なされ上皇陛下となり、皇太子殿下が即位されて新天皇となられた。上皇陛下はご高齢ながらお元気であられるから、国民は明るい心で新陛下のご即位をお祝いすることが出来た。
先帝陛下が崩御された昭和から平成への御代替わりでは、このような訳にはいかなかった。国民は先帝陛下の喪に服す気持ちの中で、平成の開始を迎えたのである。陛下がお元気なままに譲位され、新帝陛下が即位されるというのは、有難いことであると感じた次第である。心の底から新しい時代の幕開けを国民がお祝いすることが出来たからである。

思い返せば、これも上皇様のご決断によって可能となったことであり、陛下のご叡慮のお陰である。またご譲位は、明治以来の歴史の中では例外であるが、3000 年になんなんとする皇室の歴史の中では、決して珍しいことではない。
日本の歴史と伝統に基づいて、陛下はご譲位を決断されたのである。

改めて天皇と日本人について考える

優しい言葉で説明すれば、皇室とは日本国中の家族の総本家中の総本家である。その当主が天皇である。皇室に姓がないというのは、実にこれを象徴している。皇室にもし姓があれば、それが山田であれ、林であれ、その山田家なり林家

の総本家ということになってしまう。他の氏族には関係のないということになってしまうのだ。姓がないということによって皇室は、全ての氏族の先祖であり、本家であるということを表している。

皇室の先祖を辿れば伝説の世界に行き着き、やがてそれは神話の世界に到達する。皇室の祖先神は天照大御神ということになっている。天照大御神は勿論、日本の神話という多神教の世界の中心となる神である。その子孫が天皇として日本民族の中心におわすというのが日本国の普遍の形である。

王族が神の末裔であり、その王族を中心に国家が組織されているというのは、恐らく人類史上に国家というものが生まれた時の原初的な形態であろう。

このような国家構造は、古代には世界中に存在したはずである。というよりも、古代においては国家というのは神の末裔の神聖なる国王を中心にしてしか、組織されていなかったものと考えられる。ところがこのような神話的国家は次々と姿を消してゆき、おそらくそれが唯一残っているのが日本という国なのである。そもそも生きた神話が存在している国や民族というのが、この世界に幾つあるだろうか。天皇を中心として日本国家が成立しているということは、日本神話が現代も生きているということを意味する。

そして１つの民族が１つの生命体として、連続して存在してきたことを意味している。今、生きている神話をもっている民族が日本の他に少なくとも、もう１つは存在する。それはユダヤ民族である。彼らは民族の神話である旧約聖書を信じてユダヤ民族は、その信仰を中心に団結を保っている。

旧約聖書とは、紛れもなくユダヤ神話である。ユダヤ人は第二次大戦後、イスラエルという国を作った。そして旧約聖書の伝統を守り続けている。それは素晴らしいことだが、今日イスラエルを訪れても、そこにはソロモン王やダビデ王の末裔は存在しない。即ち、ユダヤ民族の王統は途絶えてしまったのだ。

かつてギリシャ神話というものが存在し、それを中心にギリシャ民族が古代において繁栄した。今、ギリシャに行って見ても、そこはキリスト教世界になっておりギリシャ神話は、最早生きてはいない。ましてギリシャ神話の主神たるゼウスの末裔が、王として君臨しているわけでもなくギリシャ神話は、古典になってしまい生きた神話ではない。

北ヨーロッパに存在した北欧神話についてもまた、然りである。

北ヨーロッパ諸国は悉くキリスト教化してしまい、北欧神話は死んだ物語になってしまった。それは研究や知的興味の対象ではあっても、人々の生きた伝統を支える存在ではなくなっている。生きた神話を持っているのは、現代世界では日本民族とユダヤ民族だけであろう。

そして更に日本には、神の末裔であると伝えられている天皇が存在するのである。これを考えただけでも日本が如何に稀有な民族であり、国家であるかが理解できるであろう。その点で日本は特殊な国といえるかもしれない。しかし、人類の最も古い国家の形を保持しているという点において、日本の伝統には世界的な普遍性があるとも言えるであろう。

日本が日本であるということは、日本が皇室と天皇を中心に、団結した国であるという事を意味する。天皇と皇室を失ってしまえば、日本は日本でなくなってしまうのだ。日本国の政治体制は何度も変わってきたし、今後も変わるであろう。しかし天皇を歴史的統合の象徴とする日本国のありようは変わらないし、また変えてはいけないのである。

この「国の根本的なありよう」を一般には「国体」と言い表している。

政体は変えることが出来るが、国体は不変であり変えてはいけない。これが日本という国そのものであるからだ。天皇の地位は歴史を辿れば伝説の世界に行き着き、さらに神話の世界へと入ってゆく。その故をもって、天皇の存在を否定する者がいる。しかしこれは、とんでもない思い違いである。人間が思い出すことが出来ない程、遠い過去の時代から天皇という伝統が続いているということは、素晴らしいことなのだ。

国の形が直接に伝説から生まれ更に神話から生まれている国は、そしてその国家の存続が一貫している国は日本しか存在しないのだ。周知のようにユダヤ民族はディアスポラという形で世界に分散し、ユダヤ人国家が再生するのに 1900 年の年月を必要とした。伝説から、神話から生まれた国であるからこそ、日本は「貴重な国であり、天皇の存在は尊いもの」なのである。

合理的に考えれば、神話というものにも現実的な背景があったものと考えられる。即ち、高天ヶ原というのは恐らく、日本民族の中核となる人々が住んでいた理想的な地域だったのであろう。そこから日本列島に渡来した人々が、そのかつての民族の故地を「天界の高天ヶ原」というように言い慣わしたのであろう。

だから神話といい、伝説といっても何らかの現実的な基礎があって、そのような神話や伝説が創造されたものと考えられる。ともかくも伝説や神話の中にまで国の起源を遡ることが出来る日本国は、人類史上稀な真に恵まれた存在なのである。当然のことながら外国に占領され、自国の文化が完全に破壊されるということもなく独立を保ちえたからこそ、この伝統が守られてきたのである。

それには勿論、日本列島の地理的な条件も大いに助けとなったであろう。しかしそれ以上に、日本国の先祖が外敵の襲来からこの国を守り外来文化を盲目的に受け入れずに見識をもち、取捨選択して受け入れてきたという事がはるかに重要であろう。このことを我々はつくづく先祖に感謝しなければならない。

祝福する聖者としての天皇

人は「天皇は祈る人である」という。日本民族の安寧を、人類の平和を祈る尊い方が天皇なのだ。そういう言い方をよく耳にする。かつては筆者も、天皇は祈る人であるとばかり思っていた。しかし天皇は、単に祈る人ではないのだ。天皇は祝福する人なのである。いや、祝福する聖人なのである。嘆くものから祈るものへ…祈るものから祝福するものへ…魂はより高い次元へと進化し上昇する。

天皇は俗なる次元から出て、俗なる次元と聖なる次元をつなぐ存在である。

聖なる次元とは何か。聖なる世界とは、神秘の世界であると同時に夢想や架空の世界ではない。この現世に確かに存在する世界である。それは最小の利己主義と最大の利他主義の世界である。それは高貴な世界と呼び変えてもよい。

天皇が高貴であるとは、そういうことなのである。

天皇は、最小の利己主義と最大の利他主義の具現である。天皇に私なしという。天皇は常に「国民と共に慶び…国民と共に悲しみ…国民の努力…日々の営みを祝福してくださる高貴な方…即ち聖人である。それが天皇なのだ。

天皇が高貴な存在であるからこそ、その高貴な存在に祝福を受ける国民は、みな心から喜ぶのである。天皇は単に祈る存在ではない。精神の高い立場から、国民を祝福してくださる方なのだ。嘆くものから祈るものへ…祈るものから祝福するものへ…これが魂の進化の段階である。聖なる次元に至った者だけが、真に国民を祝福することが出来るのだ。天皇は聖人であり、詩人・歌人である。

国民の悲しみを慰め、その日々の務めを祝福してくださる歌人でもある。それ故に、和歌の伝統は天皇にとって極めて重要なものである。

日本民族とは、そのような天皇を自らの中心に置き、団結し続けてきた民族である。天皇なくして国民はないが、国民なくしても天皇はない。国民は、天皇を私心なき存在として支え続けてきた。そして天皇は、国民の存在に応えてきた。

天皇は常に、民族全体のことを我がことのように考え行動してきた。そのような方こそが天皇である。日本の歴史と伝統を一身に具現している存在が天皇である。天皇はまた、日本民族の道徳的前衛でもある。

日本人誰しもが天皇に倣い、利己主義を離れた存在となることを目標に、自らの人生の研鑽を重ねるのである。その意味で天皇は日本人全ての鏡なのである。

天皇は日本人の理想の実現そのものである。

天皇は日本民族の安寧を祈り、祝福するだけではない。

天皇は世界人類の安寧を祈り、祝福する存在でもあるのだ。